

新島襄と函館

文と写真 本井 康博 (大学神学部教授)



新島の像 (全身)

北海道志向

新島襄は北海道が好きだった。晩年に、組合教会（会衆派）と一致教会（長老派）という当時の二大プロテスタント教派が、合同をしようとした運動が起きた時のことである。彼は、組合教会派の最有リーダーのひとりでありながら、批判と反論を繰り返した。

植村正久を始め、相手陣営の指導者はもちろん、小崎弘道ら「熊本バンド」の教え子たちが、揃って合同に突き進もうとするのに対し、新島は慎重だった。「合同が実現したら、北海道へ行く」と漏らした、という。

結局、合同運動は挫折した。このため、門弟たちからは、新島は痛烈な批判を受ける。「新島先生ともあろう人が……」と。

自由の王国

それに加えて、渡米が、後半生の自由な人生をもたらす契機となった、という自覚。同時にそれに伴う関係者への感謝の気持ちもあつたはずである。

要するに、北海道、とくに函館は、彼にとつては「閉塞からの出口」、すなわち「自由への入り口」となった。

ただ、北海道に入れ込むと言っても、現実に新島が北海道に住んだり、そこで働いたりする機会が、一度もなかった。北海道を訪ねたのは、わずか二度だけである。一度は、函館から密出国した時、そして二度目は函館を経由して札幌で避暑をした時。それでも函館は、二度足を踏み入れた点で、新島にとつては北海道の中では一番親しいスポットであった。

フロンズ像と記念碑

その函館の西波止場には、新島襄のフロンズ像が立つ。函館ウォーター・フロント計画によって函館市が2002年に設置した。全身像としては、ほかに合衆国の首都にあるワシントン大聖堂（聖公会系）にあるだけである。

自由への入り口

新島が北海道にそこまで魅かれたのは、いったいなぜか。ひとつには、青年時代に、窒息状態の藩邸生活や、不自由な封建体制を嫌って、自由を求めて函館から密出国したことが、挙げられるであろう。

た。新島は珍しく弱気になった。「学校長をやるよりも、田舎で牧師をやりたい」と、しみじみ述懐したという。

また、「同志社を辞めて、北海道へ行く」と発言したこともある。行って何をするのか、という点、「北海道で開拓伝道をしたい」という。「田舎牧師」は、どうやら彼の夢であった。その場合、理想の「田舎」とは、ひとまず、北海道を意味した。

田舎伝道に地道に従事することにより、「自由の王国」を日本にも実現したいという想いがあつたのだろう。それには、北海道が最適なステージであった。彼は「北海道を日本のニュー・イングランドに」という夢があつた、と思われてならない。

なぜ、新島は反対したのか。合同すれば自由・自治を損なう、との懸念から、批判的、慎重にならざるをえなかった。彼が見るところ、組合教会（会衆派）は、すべての教派の中で最も自由度が高い。最大のメリットであるこの自由を犠牲にしてまで、合同することはない、との確信が、彼にはあつた。

その背景には、ニュー・イングランドで8年間暮らした、という経験が大きかった。会衆派の「本場」というか、本拠地の教会と学校で、会衆派をベースとした密度の高い留学生生活を送ることができた。これは、日本人としては、稀有な体験である。

いわば「自由の王国」で宗教的な自由を身体ごと体得した、といった自負心が、新島にはあつたはずである。そうした新島にすれば、「熊本バンド」は自由を「安売り」しすぎであった。

「北海道を日本のニュー・イングランドに」

同志社に問題が起きた時も、そうだった。

西波止場から海に沿って少し歩けば、「新島襄海外渡航乗船之処」碑がある。1954年8月に同志社が設立した。もうすぐ「還暦」である。

碑には「渡航」とあるが、実態は「密出国」にほかならない。犯罪者となつてまでも、なぜ渡航しようとしたのか、その動機は渡米の途上、香港で作詞した漢詩に窺える。その歌詞が、碑に彫られている。その一節に「千里の志」という文言が、含まれる。

「緑の島」と「新島橋」

函館で密出国の手引きをしてくれた日



新島の像（頭部）

ナ―は、同志社の卒業生ではない。

函館丸

店の近くの陸地には、1988年から函館丸が復元公開されている。日本人によって建造された洋式帆船としては、日



函館丸

本人は、3人いる。菅沼精一郎、沢辺琢磨、そして福士卯之吉（成豊）である。なかでも福士である。彼は、碑の立つ場所から新島を沖に停泊するベルリン号まで、小舟で運んでくれた。ひどく慎重であった。わざわざ小舟を借りて、3日間もリハーサルをした、という。

記念碑の背後の海には、1980年に「緑の島」が埋立、造成された。そこへ渡る橋は、なんと「新島橋」である。新島襄への配慮から命名された、と聞いている。

現在、記念碑の前は、更地となつている。この更地が、「新島橋」へと続く「新島公園」にはならないものだろうか。

コーヒー・ハウスJOE

近くの交差点角には、喫茶店がある。店の名前を、コーヒー・ハウスJOE（ジヨー）という。いったんは閉店されたが、最近、再オープンした。ベルリン号で上海まで航海した新島は、そこでワイルド・ローヴァー号に乗り換えた。乗船した日に、船長から、「今日からお前をJOE



コーヒー・ハウス Joe

と呼ぶ」と言い渡された話は、よく知られている。

十年後に帰国した際、新島は幼名（七五三太）や、元服後の諱（敬幹）には、戻らなかった。別人格となつていたので、彼はアメリカでの生活の延長として、彼はJOEを襄と漢字変換させた。

コーヒー・ハウスは、白い壁が瀟洒に映える。その昔の廻漕店（函館市景観形成指定建造物）をそのまま利用しただけに、独特のレトロな雰囲気がある。オー

新島に、函館情報を流したのは山田である、との伝承が、上州安中にはある。その山田は、函館時代、続と交流があったということとは、新島にとって、函館は、それほど遠い存在ではなかった。

称名寺と山上大神宮

福士の墓は、称名寺（浄土宗）にある。函館山の麓にあり、海を臨む場所に建てられている。父（統豊治）の墓は、隣の実行寺（日蓮宗）である。親子で別々の寺に葬られている。福士が他家に養子に行つたからだろう。

寺の近くの柴坂は、かつては神明坂と言われた。坂の中腹に神明社があったからだ。数ある函館の坂の中では、最長である。坂を登りつめたあたりにあるのが、山上大神宮。かつての神明社が、今はこう改称されている。

沢辺琢磨

新島が函館に来た当時の神官が、土佐出身の沢辺琢磨である。神社の案内板に



富士成豊の墓 (右)

は、歴代神官のうち、第八代宮司の彼の名前だけが記されている。さすがに坂本龍馬のいとこだけのことはある。「時計事件」で江戸を追われた沢辺は、結局、函館に流れ着いた。思わぬ縁から、新島の密出国を助けた。

沢辺は、新島がニコライ神父の許を去って密出国してから、ニコライに近づく。

神官として邪教を攻撃、排斥するつもりだった。が、ミイラ取りがミイラになった。

その後、ハリストス正教に入信したばかりか、日本人初の同教司祭にもなる。新島が牧師、宣教師となつて10年後にアメリカから帰国したころは、仙台にあつて盛んに伝道中であつた。相互の交流は、もはやなかつた。が、ふたりが揃つて宗



旧ロシア領事館

教者になつたのは、奇しきことである。

武田塾

栄坂から、函館で一番広い基坂に出ると、武田塾跡やペリー提督・函館来航記念碑、奉行所跡（今は元町公園）が並ぶ。奉行所は1864年7月にほぼ竣工したという。ならば、新島が密出国したのと同じ月だから、彼は、完成したばかりの奉行所を見ていたのではないか。

函館へ行く許可を藩から取るために、新島は、修業するために函館へ赴く、と届け出た。修行先の塾が武田塾である。奉行所が設立したものである。

ところが、ようやくのこと函館に来たものの、なんと武田斐三郎は、江戸に戻つたところであつた。新島としては、入塾する意味が無くなつたのも同然である（ちなみに山本覚馬は、武田と江戸で交流があつた）。

その後、塾頭の萱沼精一郎が、骨折つて、新島にニコライを紹介してくれた。来函して2週間後のことだつた。新島はなんとか外国人に接近してみたかつた。

元町公園

奉行所があつた現在の元町公園には、写真歴史館がある。新島の写真も1枚、展示されている。アーモスト大学で、級友にせがまれて写真を撮つた扮装姿である。脱国時の装束が再現されている。

この公園に建てられていた箱館奉行所は、一昨年、28億円をかけて復元され、五稜郭のど真ん中に移築された。

ハリストス教会と五島軒

基坂の次は、ハリストス教会である。新島は約40日間、この敷地内にあつた司祭館に住み、ニコライの家庭教師をしながら、ロシア人から英語を学んだ。目の治療をもらったロシア病院も、この敷地内にあつた、という。新島はその見取り図を書き残す。

近くの二十間坂に五島軒本店がある。富士の妹夫妻が始めたという函館最古のレストランで、建物は国指定の有形登録文化財である。現在は、4代目の社長（若山直氏）が経営する。



ハリストス教会

かつて「朝日新聞」に連載された船山馨「蘆火野」という小説には、富士や新島が実名で登場する。五島軒には、その原稿を始め、いろいろな展示品を並べた「メモリアル・ホール蘆火野」が備わる。

五稜郭

ついで、「北海道のダビンチ」こと、武田斐三郎が設計した五稜郭である。タワーからの眺望が楽しめる。そればかり

か、移築された奉行所も、見ものである。新島が五稜郭へ足を運んだという記録はない。しかし、40日以上に及んだ滞在中、ここを訪ねなかつたとは思えない。まして、あの武田先生の忘れ形見である。

函館千歳教会

五稜郭から南行すると、松陰町に函館千歳教会がある。現在、同志社出身の井石彰牧師が、担当される。ここには、新



函館千歳教会が所蔵する新島の遺髪



函館千歳教会



脱国碑

島裏の遺髪が保管されている。函館を出た新島が、上海あたりで下ろしたちゃん髻の一部と推測できる。

出所も明確である。そもそもは、新島の教え子の堀貞一という牧師（同志社出身）が、八重未亡人から分けてもらったものである。堀が、それを教会（片山幽吉牧師の時代であった）に寄贈した、というわけである。

幻の碑とブロンズ像

片山牧師は、熱烈な母校愛に富む熱血漢であった。彼は、新島が小舟に乗って密出国した現場を突き止め、そこに記念碑を建設することを考えた。けれども、倉庫がすでに建てられていたために、現地に建てることは断念した。代わりに教会の前庭に建造する夢を抱いた。碑だけ

でなく、新島の銅像もいっしょに建てたい、と夢は広がった。1930年代のことである。
結局、片山の計画は流れた。実際に碑が実現したのは、片山構想から17年後の1952年、像にいたっては、63年後である。いずれも、函館市が首頭をとって、竣工させた。

二度目の渡道

密出国してから、23年後、新島は、再度、北海道を訪ねる。1887年のことである。今度は、妻の八重を同伴した。新島は仙台での仕事（同志社分校設立）を終えた後、札幌でひと夏、避暑をするため、函館から小樽に船で向かった。

函館着は、7月3日。都合、4日間、滞在した。7日に小樽から札幌に入った。新島夫妻を福士成豊、大島正健らが出迎



函館千歳教会の講壇

えた。福士は、居を函館から札幌に移し、土地の名士になっていた。大島は、いわゆる「札幌バンド」のひとりであり、母校の札幌農学校の教授のかたわら、札幌独立教会の牧師を兼務していた。

札幌で避暑

新島夫妻は札幌では、9月7日までの2か月間、福士の持ち家を借りて避暑をした。同家は、いまも現存する。札幌市（厚別）の「北海道開拓の村」に移築されて、公開されている。

札幌からの帰途にも新島夫妻は再度、函館に立ち寄った。滞在は、9月17日から20日まで及んだ。この間、同じ小樽にある一致教会（長老派）や美以教会（メソジスト派）といった他教派の教会でも説教を披露している。

いまだ、自派の会衆派系教会はここにはない。同志社系の函館組合教会（現在の函館千歳教会）が立ち上がるのは、新島の死後である。

遺愛女子中高

新島夫妻は、ミッション・スクール（メソジスト派）の遺愛女子中高（杉並町）にも足を運ぶ。八重夫人ともども、遺愛の女性宣教師から食事に誘われた。場所は、現在地に移る前、すなわち元町（今の遺愛幼稚園のある所）である。

振舞われた家庭料理が、本格的な洋食だとしたら、万事洋風の新島には、こたえられない夕食だったであろう。



遺愛学園正門